

高野久輝君を悼んで

川島 康生

国立循環器病研究センター名誉総長

1976年のある日、曲直部寿夫教授から呼び出された私は、晴天の霹靂ともいべき先生の宣言を聞いた。曰く、「川島、循環器病センターは国家的事業やから俺が行くぞ」。「……」私は無言であった。というのも、これに先立つ数年間、後の吉田常雄初代総長のもとで開かれた国立循環器病研究センター（National Cerebral and Cardiovascular Center, NCVC）設立の準備委員会に私は何度も参加し、曲直部教授には外科部長としてセンターに赴任させて頂く事を重ねがさね御願ひしていたからである。

大阪大学第一外科関係の多くの人、いや、それ以外の人も含めた多くの人の運命がこの一言でガラッと変わった事はいうまでもない。高野久輝君の人生も例外ではない。

総長よりも先に辞令が出た曲直部院長の人事は早かった。私が教授に決まるのを待たずしての、研究所への人員要求である。私としては、新しい教室は人工心臓と心臓移植を研究の両輪として進めたい構想を持っていたが、それぞれの責任者とすべき高野君、広瀬一君（後の岐阜大学教授）がともに曲直部先生に目をつけられている事は自明であった。1人は止むを得ない。そう決意した私は考えた。阪大でいくら頑張っても、得られる研究費は人工心臓を作れるほど多額というのは無理であろう。一方、移植の方は、ベラボーな予算はなくてもそこそこの研究はできるのではなかろうか。それに比べてNCVCの研究所は、本邦唯一の国の人工心臓研究所として日本一の研究費を確保する事も夢ではないだろう。高野君にNCVCへ行ってもらう事にしよう。

この時に高野君のNCVC型人工心臓の出現が決まったといってもよいのではなかろうか。高野君は卒業後まだ日の浅かった1969年から、米国ミシシッピ大学の阿久津哲造先生のもとに留学し、人工心臓に関する研究を重ねてお

り、適任と言ってこれほどの適任者は他にはない。1978年4月、曲直部先生の熱い期待を受けて、彼はNCVC入りしたのである。

その後の本邦における人工心臓の研究は、渥美和彦教授率いる東大型と高野久輝部長率いる国循環型が競い合い、ともに臨床使用の域に達する成功を収めたが、好事魔多しで、最大の危機は1993年に訪れた。

高野君が脳出血で倒れたのである。報せを受けて駆け付けた私は、そのCTを見せられて、残念ながら高野君は生命は取り留めたとしても、その研究人生はこれで終わったと思った。しかしそれは幸いにして、脳外科に疎い心臓外科医の判断でしかなかった。彼は不死鳥のごとく蘇って研究を続け、体外式人工心臓の研究を完成させ、彼のdesignした心臓はその後、東洋紡株式会社からニプロ株式会社へと製造会社に移ったが、実に総数1,000例以上の心不全患者に用いられたのである。

その後、体内埋込型が次々と開発され、今日では体外式はもはや一部の使用に限られているが、それに至るまでの一時期を担ってbridge to transplantation, bridge to recoveryとして活躍したのである。それを世に送った彼の功績は誠に大きいといわねばならない。それを装着した患者さんが大阪からテキサス州へ小型ジェット機を使っての初の渡航移植に成功したのも、この人工心臓であった。

脳出血による後遺症を克服し、何とかコロナの感染にも打ち勝ったかと思われたその時、突如として状態が悪化して帰らぬ人となられた。年齢からいえば、まだまだ働いてもらいたい頭脳の持主であっただけに惜しまれてならない。

心から御冥福をお祈りします。